

【実践記録】

珊瑚舎スコーレ・ガンマリのワークショップの記録

盛口 満

はじめに

珊瑚舎スコーレは2001年に那覇市に開校したNPO立の学校である。当初は専門部、高等部、中等部の3部構成で始まったが、2004年に夜間中学を開講し、2021年には那覇市から南城市の馬天港近くに自前の校舎を建設し移転している。また同年より高等部は学校法人雙星舎立の専修学校として認可され、現在は高等部以外の教育活動としては、NPO 珊瑚舎スコーレとしての中等部、初等部（小学校4年以上対象）、キッズスコーレ（小学校低学年及び未就学児対象）、夜間中学が設置されている。

私は2001年～2011年の間、珊瑚舎スコーレにおいて講師をしていたことから、2007年に沖縄大学に在職後も、ゼミ活動などにおいて珊瑚舎スコーレの活動と関わってきた。最近の関わり方としては珊瑚舎スコーレの「子どもガンマリ」の活動に、年、1～2回関わっている。

ガンマリというのは、珊瑚舎スコーレの校舎が南城市に移転する以前から活動の拠点としてきた、南城市馬天小学校近くの二次林における野外活動拠点および、その拠点における活動の名称である。ガンマリという名称の理由、およびその教育目的について、珊瑚舎スコーレの代表である星野人史さんは以下のように書いている。

「がんまり」は沖縄の方言で、「遊び」、「ごっこ」あるいは「いたずら」とか「わるさ」のことです。「ていーがんまり」は「手遊び」、「山がんまり」は「山遊び」ということになります。ちなみに、「がんまらー」は「いたずら好き」のことです。

（中略）

かつて、沖縄の民家は天水を利用した循環型の生活をしていました。山がんまりはその知恵に現代の知恵を取り入れた「島型循環エコシステムの再生と体験の場」として環境教育の役割を果たすものです。同時に珊瑚舎の学校教育に対する考え方を具体化する上で重要な位置を占めるものでもあります。

（中略）

山がんまりでの生徒たちの動きを見てみると、「させられる」身体から「はたらきかける」身体への変容を見ることが出来ます。作業現場が自分の場として広がり始めると、たとえば大工道具などを使いこなせるようになると同時に、次に続く作業への備えができ、自ら動き始めるのです。つまり、思索と想像力に呼応した体の動きが内面に準備されるのです。これは単に「山がんまり」での活動に対してだけでなく、日常生活の様々な場面に対しても現

れてくるのです。(以下略 星野 2010)

珊瑚舎スコーレでは、高等部、中等部等にそれぞれカリキュラムがあるが、昼間部の生徒は毎週金曜日に終日、このガンマリと呼ばれる野外活動施設に関わる活動を行うことになっている。2005年の5月に活動を始めたばかりのときは、アカギなどの繁茂する二次林であった場所(約1000坪)に、生徒たち自身の手によって、畑をはじめ、コテージやかまど、トイレ、焼き物の窯といった施設が作り上げられており、かつ、そこにおける様々な活動が継続されている。子どもガンマリというのは、この場所で行われる、珊瑚舎スコーレの生徒以外に広く参加者(親子連れを対象としている)を呼び掛けて行うワークショップのことである。

盛口ゼミでは、2020年度、および2021年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延の関係から、感染状況が緩和した時期に、それぞれ、一回のワークショップを行うことができた。2020年度は3年生のゼミによるロウをテーマとしたワーク、2021年度は同じく3年生のゼミによるチョウの鱗粉転写を主としたワークであった。2022年度は8月に2年生のゼミによるワーク、12月に3年生のゼミによるワークを予定していたが、8月のワークショップはコロナ感染症の状況が悪化したため中止となった。今回報告するのは、12月11日に行うことができた2年生のゼミによるワークの内容である。

1. ワークの準備

沖縄大学こども文化学科のカリキュラムでは、理科の関連科目は2年生から履修することになっている。また私がゼミを担当しているのも、現在は2~4年の各学年である。このため、2年生が所属しているゼミでは、子ども向けの自然体験のワークについて、それまで経験を積んだことのない学生たちに、ワークの内容を考えてもらうことになる。2022年度の予定では、8月に子どもガンマリを行う予定となっていたため、4月の2年生ゼミの開始にあたって、その予定を告げるとともに、私のほうからワークの大まかなテーマを提示し、それに向けて準備をすることとした。

子どもガンマリに参加する子どもは未就学児~小学生の広い年齢幅に含まれている。また、なるべくガンマリの立地や設備を利用したワークを考えだせると望ましい。さらに私のゼミで行うワークなので、多少なりとも理科や自然と関わる知識なども織り込んだ要素も含めたものとしたい考える。これらを一から企画するためには準備時間が短いため、4月のゼミの開始時期にあたり、ワークのテーマに関して私のほうから提案したのである。

星野さんが書いているように、ガンマリはかつての循環型社会のシステムを模倣した施設である。そうしたことから、沖縄の自然と関わる知恵や伝承を、このようなワークの中に織り込むことはできないかと考えてきた。そのことは、将来、小学校教員をめざしているゼミの学生たちにとって、貴重な体験になるのではないかと考える。

今回、ワークを考える際のヒントとなったのは、かつて奄美大島の子どもたちが遊んでい

た「チンニャン弓」である。チンニャンとはカタツムリのことで、チンニャン弓は、カタツムリの殻を飛ばして遊ぶという弓である。ガンマリのある沖縄島南部は石灰岩地であり、そのため、カタツムリが豊富に棲息している。中でも普通にみられるオキナワヤマタニシは、小粒であると同時にしっかりした殻をもち、チンニャン弓の弾としては最適である。子どもたちはパチンコや弓矢などで遊ぶのが大好きであるが、こうした遊び道具に使うものが自然物であれば、自由に遊ばせた後、ごみが散乱するということにならずにすむ。また、チンニャン弓を作るには、それなりの竹細工の経験が必要であり、学生たちがワークの準備をしながら、星野さんのような身体の学びを体験することができる。

ワークの準備としては、竹細工に親しむことから始めた。そのため、2種類の竹鉄砲を作り、鋸そのほかの基本的な工具の使い方を習熟してもらった。木を削ってうなり木を作ることで、小刀の扱いも慣れてもらい、またうなり木とともに竹笛を作ることで、音を作る遊びにも取り組んだ。そうしたうえで、チンニャン弓を作ることとした。この作業には、鉋で竹を割るという工程、ドリルで竹に穴をあける行程が必須となる。同時に、子どもガンマリに参加する子ども達の人数分の弓の材料の下準備を行うことも必要となる。

こうした技術的・素材的な面に関する準備と並行する形で、ワークを作る上では、どのような構成や、知の伝授が必要であるかを考えてもらい、少しずつワークを作り上げていった。

2. ワークショップ当日

ワークショップ当日、子どもガンマリワークの始めるにあたり、珊瑚舎スコーレのスタッフである松田浩史さんから、参加者に向けて施設の説明と、利用にあたっての注意が語られた（以下、Mは松田さんの言葉、Sは参加者の言葉を表している）。

M：ガンマリは沖縄の言葉でいたずらという意味です。昔は山ガンマリという言葉もありました。学校に行く代わりに野山で遊びながら、でも何かを学んだというようなことを、こんなふうに言ったんです。ガンマリは珊瑚舎スコーレ昼間部の生徒たちが2005年から作り続けています。ここで気に留めてほしいことがあります。それは水のことです。この施設にも、蛇口やお手洗いがあって、例えばレバーを押すと、水がジャーっと流れます。でもここには水道は引いていません。天水を溜めて使っているんです。タンクがいくつかあるのが見えますね。雨水を屋根から引いて、その水をタンクに溜めて使っているんです。だからこの水は直接、飲まないでください。皆さん水筒を持ってきていると思いますが、足りなかったらお茶も用意しているので、それを飲んでください。さて、みなさん、昨日一日で、どんなことに水を使いましたか？

S：トイレ。

M：トイレを使った人は手を挙げてください。ほかには何に使いましたか？

S：お風呂。

M：じゃあ、シャワーを使った人は手を挙げてください。まだありますか？

S：飲み水。

M：いろんなところで水を使っていましたね。トイレを一回流すと、どのくらい水を使うかわかりますか？ 10 リットルです。大きなペットボトル 5 本分にもなります。シャワーだと 80 リットルです。食事の用意にも水を使います。洗濯にも使いますね。蛇口を流しっぱなしにしてしまうと、何十リットルもの水を使うことになります。こんなふうにしたら、この水はすぐになくなってしまいます。なので、水を大事に使ってください。それからトイレです。トイレットペーパーは、便器の中ではなくて、ゴミ箱の中に入れてください。うんこやおしっこも、肥料として使いたいと思っているからです。それから、コテージに上がる時やツリーハウス、ハンモックを使うときは靴をぬいでください。そしてほかのところで靴を履いてください。施設だけでなく、この場所にいる、生き物も大事にしてほしいと思います。

続けて、珊瑚舎スコーレのスタッフである樋口佳子さんからも補足の説明がなされた。

H：古民家が建てられているのが見えますね。今、修理中なので、中を見ることはできません。でも、古民家の周囲には、雨水を集めるためにフクギが植えられていたりします。外から様子を見るのは構いませんよ。コテージの後ろには、ガンマリ窯と呼んでいる、ヤチムン（焼き物）を焼く窯があります。ここも、見学するときは、大事に見てください。あと、ガジュマルの木がありますが、枝からヒゲ根が垂れていますね。このヒゲ根をぶちっと、切らないでね。地面まで垂れて太くなっていったらいいなと思っているんです。



珊瑚舎スコーレ
ガンマリ
右手に見えるのが
コテージ

この後、私が沖縄大学盛口ゼミの簡単な紹介をして、以後の運営を学生たちにバトンタッチした。参加者も含めて全員、コテージの上にあがり、学生たちによるワークを行った。

3. ワークのプログラム

ワークはゼミ長の学生の司会による、11名の参加学生たち一人ひとりの自己紹介をスタートとし、5人の学生が交代をしながら進めていった。参加した子どもは最年長が小学6年、最年少が4歳の合計9名であった（以下、Tは講師訳の学生、Sは参加者（子どもたち）の発言）。

T: 今日は軽く英語の授業をしようと思います。英語のあいさつ、何か知っているかな？

S: ハロー。

T: じゃあ、夏は英語でなんて言うかな？

S: わかんない。

T: 夏はサマーです。じゃあ、夏休みには何をする？

S: 海に行く！

S: 虫捕り！ 公園で捕まえる。

T: 何を捕まえる？

S: バッタ。

T: ここに虫捕りをしている子の絵があるよ。何の虫がいる？

S: セミ！

T: セミは英語で何というでしょう？ わからないよね。英語ではシケイダって言うんだよ。虫捕りをしている子の絵を見てね。どんな格好している？ 網をもっているよね。帽子もかぶっているよね。この帽子…麦わら帽子だけど、英語ではなんていうかわかるかな？ 英語でストローハットっていうんだよ。ストローって聞いたことがある？

S: ジュース飲むとき、使う。

T: そうだね。麦わら帽子のストローは、そのストローと同じだよ。麦わらがなんでストローっていうかということ、これが本物の麦わら（麦わらを取り出して見せる）。これを昔の人はストローにしていたわけよ（麦わらの一部をハサミで切り取る）。中が空洞になっているんだよ。見えるかな？（子どもの前にストローをかざして見せる）。

S: かるうじて見える。

T: 昔の人はこれで飲んでいたんだね。実際にこのストローで飲んでみるよ（コップにお茶をそそぎ、麦わらのストローで飲む）。

S: まずい？

S: (コップが空になったのを見て)マジックだ！

T: マジックじゃないよ。ちゃんとストローで飲んだんだよ。でも、このストロー、弱くて、すぐに折れちゃう。だから、この麦わらストローをレベルアップしたストローを作ってみようと思います。中が空洞で、周りが硬いものがあるんだけど、何かな・・・？

S: 竹！

T：正解は竹を使ってストローを作るです。じゃあ、材料を配って、作り方を説明するね

授業者が交代し、竹を切ってストローを作る手順を説明をする。鋸を使い、適当な長さに竹を切り落とし、切断面は紙やすりでなめらかにする。鋸を使い慣れていない子もいるので、学生が一人一人のわきについて、一緒に竹を切る作業を行った。全員がストローを作ったら、紙コップにお茶を入れて配り、実際にストローを使って飲んでみた。

ここで、授業者が交代した。

T：ストローを作ってもらったけど、竹ってなんだろうというのを、クイズしていきたいと思います。さあ、竹は何が大きくなったものかな？

S：タケノコ！

T：ここに3つの絵があります。竹は何が大きくなったものでしょう。1番タケノコ、2番キノコ、3番ツチノコ。

(ツチノコに笑いが起こる。手をあげてもらおうと、全員タケノコにてをあげた。)

みんな、タケノコは食べたことがある？ じつは、ラーメンのメンマもタケノコなんだよ。

S：メンマ、おいしくなーい。

T：次のクイズに行く前に、竹に似ている植物でパンダが食べているのは何？

S：ササ！

T：じゃあ、どこが違うかわかる？

S：太さ？

T：竹もササもタケノコから育つけど、成長したあと、タケノコの皮がいつまでも残っているのがササで、皮がすっかりなくなったのが竹なんだよ。

S：ほとんどおなじじゃない。

T：じゃあ、クイズの第二問。パンダは一日にどのくらいササを食べるでしょう。一番1キロ、二番5キロ、三番20キロ（重さをイメージしやすいように、1キロは牛乳パックを描いた絵、5キロは鉄アレイを描いた絵、20キロはポケットモンスターのリザード…設定で体重が20キロとなっている…を描いた絵を提示した）です。

S：リザードだ。火トカゲの進化版だ。

S：リザードの塗り絵したよ。

T：もう一回、問題を言うね。パンダが一日に食べるササの量はどれでしょうか？

(ほとんどの子が20キロに手を挙げた。)

パンダって、なんでこんなにササを食べるんでしょう。パンダは昔肉食だったんだけど、他の動物と餌を競争するのがいやで、ササを食べるようになったんだよね。

S：違うよ。氷河期になったときに、パンダのいるあたりだと、ササが一番栄養がある食べ物だったんだよ。

T：おお、君のほうが先生みたいだね。先生、替わる？ じゃあ人間はどのくらい食べてい

るかな？

S：三回。

S：10 キロ。

T：私たちは3キロも食べてないんですよ。でも、パンダは20キロも食べるんだね。では、第三問。竹がでてくる昔話と言ったら何でしょう？ 一番かぐや姫、二番桃太郎、三番浦島太郎。

S：かぐや姫！

T：竹はいろんなところにも使っていました。今度は笛を作ろうと思います。

授業者が交代した。

T：笛ってわかるかな？

S：リコーダー。

T：体育の授業で使うホイッスルとかもそうだよね。今日は竹を使って笛を作ります。じゃあ、先生が鳴らしてみます。

(竹の一端を斜めに切り、そこにリードとして使用済みフィルムを差し込んだ笛を吹く。プーッといったような音が出る。)

S：おならの音だ！

T：音ってどんなして鳴っているかわかるかな？ 声も音だよ。みんなで確かめてみよう。みんな、喉に手をあててみて。あーっって声をあげてみよう。喉のところがふるえたよね。振動で音が出る楽器をみせるね。

(うなり木を取り出し、振り回して音を出す。)

じゃあ、竹の笛の作り方を説明します。

竹を好きな長さに切る。一端は斜めに切り落とす。斜めに切り落としたほうの竹の稈にカッターで切れ目を入れ、そこにフィルムを差し込み竹の切り口の形にあわせて切る。これを口にくわえて吹く。学生たちが子どもたちを手助けしながら、一人一本、竹笛を作っていた。

授業者が交代した。

T：みんな鳴ったかな。もう少しやってみましょう。みんなは今日、何を作ったかな？

S：ストロー。

S：笛。

T：竹っていろんな道具になるんだよ。竹を使った道具で昔は生活をしていたんだよ。例えば野生動物を狩ったりするときにも使ったんだよ。どんな狩りの道具かな。

S：吹き矢。

S：竹槍。

T：今回作ってもらいたいのは弓矢です。竹は軽くて丈夫で水に強いし、しなるんです。
(チンニャン弓を見せる。)

S：飛ばしてみて。

T：普通の弓は矢が飛んでいくけど、これは矢が飛ばないで、矢の先につけたカタツムリが飛んでいきます。じゃあ、作り方を紹介します。

授業者が交代し、作り方を説明した。弓本体になる竹は、ホウライチクのような太目の竹（野外でホウライチクを採取したが、それでは量が不足したのでホームセンターで同様の太さの竹を購入した）で、これを事前に学生たちが四つ割にして、節の内側のでっぱりも落としておいた。矢となるものはリュウキュウチクの細い稈で、これも余分な枝葉は事前に落としておいたものを用意した。まず、弓の竹の中央に太いドリルで矢の通る穴をあける（穴が小さい場合はやすりで大きくする）。つづいて竹の両端に、細いドリルで弦を取り付ける穴をあける。また中央部分には補強のためビニールテープを巻き付ける。子どもたちは手動のドリルで穴をあけるのに苦勞をしていたが、なんとか弓を作ることができていた。この弓の穴に矢となる細い竹を通し、弦を取り付ける。完成したら、矢の先にカタツムリ（ヤマタニシ）の殻をとりつける（ぴったりはまるように、柔らかい葉をかませる）。後は弦を引き絞って放つと、カタツムリが飛んでいくというしくみである。



チンニャン弓をつくる参加者と
それを補佐する学生たち

10時から始まったワークは、チンニャン弓を作り、カタツムリを飛ばすところでちょうど12時過ぎとなった。ここでワーク自体は終了し、昼食をとり、午後は3時まで自由にガンマリで遊び解散とした（午後にたき火をたいて、焼きマッシュマロを作って食べるという、

補助的なワークも取り入れた)。

4. 学生の感想

以下に参加した学生の感想をいくつか紹介する。

「ワークショップには小学校低学年が来るとイメージしていたが、未就学児が多かった。授業が始まる前は、子どもたちも自由に走り回ったり遊んでいたりと元気で活発な様子が見られた。そのため、授業で話を聞いてくれるか不安な面もあった。授業が始まると、竹に興味津々で前のめりになりながら話を聞いてくれた。ある子は、興奮しながら両手で葉っぱを投げたり。静かに座り聞く子どももいれば、立ち上がりいつも発言しながら聞く子どももいて見ていて面白かった。私は、補助として子どもたちの後ろから授業を見ていた。そして、竹でストローや笛を作る際には子ども一緒に作業をした。のこぎりやドリルを使ったことのない子どもたちばかりだろうと想像していたが、思っていたより子どもたちは器用に道具を扱っていた。のこぎりでは力が入りすぎていて危なっかしい場面もあったが、後半では慣れてきたのか上手に竹を切っていた。中には、作業に飽き外へ行く子どももいた。ちょうど私も作業が一段落し退屈だったので一緒に抜け出した。その後は、十分程度昆虫や草花を観察した。子どもたちは昆虫の名前や生態珍しさなどを説明しながら捕まえたものを見せてくれた。私の知らないことだらけで感心させられた。

後半では、竹で弓を作った。一度は飽きたり退屈していた子も弓を作って競争するというと目を輝かせて教室へ走っていった。授業の中ではいくつもクイズを出したが、私たちが想定していた答えとは違うものがたくさんでた。それだけではなく、パンダの肉からささを食べるようになった理由については小学生に補足された。私たちより小学生の方が詳しいと感じた。

今回、がんまりで授業をしたが目の前で授業を受けている子どもたちを見れてよかったと思う。どんなところに興味を持ってくれるのか、逆にあまり反応がよくないのはどこなのかなど子どもたちの様子を見られて勉強になった。また、機会があれば参加したい。(K. O)」

「こういう施設を借りての、授業などはあまりできない経験だと思う。自分たちの用意した授業の内容を楽しんでくれてよかった。子どもたちへの対応や一緒に取り組むことをうまくできて、個人的によかったと思う。自分は授業の始まりを担当した。始まりのほうは、子どもたちのテンションがまだ上がっていない状態なので、あまり飛ばしすぎず、興味を引かせることを意識した。基本的に話口調で子どもたちに問題を投げかけたり、話を止めたりしないようにすることをポイントにしていた。イメージ通りに進め切れたことはとてもよかった。自分の担当が終わった後は、工作でノコギリを使うのでサポートにまわった。小さい子もいたので、一緒についてあげないといけなかった。自分は4歳児と一緒にやったのだけれど、その子も自分でノコギリを使っていてすごいなと思った。まずはさせてみることは大切なことだと思った。そのあとは、外に興味を持った子がいたので、その子と一緒に虫取りをしていた。その子がアオカナヘビと捕まえたのだけれど、初めて見る生き物なのです

ごかった。全体を通していい経験になった (S.0)」

「とても元気な子どもたちで、私たちも楽しくやることができました。授業をする人もリラックスして授業ができているように見えたとし、子どもたちの反応も良くて、スムーズに授業がすすんでいたなと思いました。ノコギリのサポートや、弓を作る手伝いをしているときに、たくさんのコミュニケーションを取ることができました。ちょっと人見知りをしている子どももいたけれど、こっちから積極的に話しかけることで、だんだん自分から話しをしてくれるようになって、うれしかったです。

最後の遊ぶ時間は、外で虫取りをしたり、ベイゴマやけん玉を子どもたちに教えてもらいました。マシュマロを焼いた時に、私の分も子どもたちが焼いてくれて、焦げて真っ黒だったけど、それもおいしかったです。こういう外の教室で自然に触れながら授業ができたのは本当に貴重な経験だと思うし、これから先も経験することは少ないと思うので、とてもいい経験になりました (M.N)」

5. おわりに

子どもガンマリに参加した子どもたちは年齢もバラバラであったし、興味もバラバラなように見受けられた。そのような子ども達であったが、学生たちは丁寧に対応しながらワークを進めていった。子ども達の反応は、自分たちだけでワークの内容を考えていた時には思ってもいなかったことであり、そうした反応に学生たちが興味をひかれていた様子が見て取れた。学生の感想に書かれているが、実際の子どもたちや自然に触れながらの授業から、感じ取れる事は多いと思う。このような機会で、学生たちは大きく成長するのではないかという思いを強くした。次年度以降も、珊瑚舎スコーレの子どもガンマリのワークに参加する活動を行いたいと考えている。

引用文献

星野人史 2010 「山がんまり/島型循環エコシステムの再生と体験の場」 仲渡尚史編 『記録 学ぶって何だろう？Ⅲ ～珊瑚舎スコーレの授業実践記録から～』(沖縄大学学生部・学生支援 GP 事務所内 こども教育支援スクエア) pp.3-7